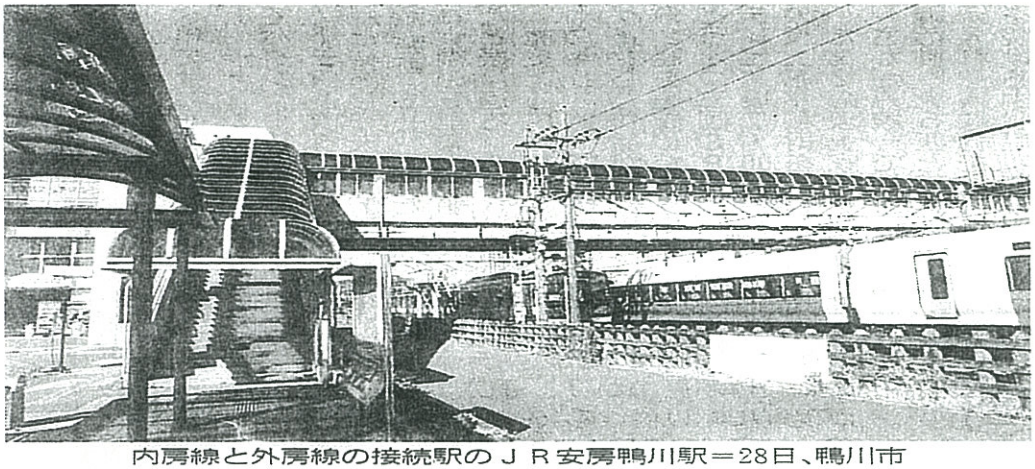
ＪＲ東 地方路線収支初公表

沿線住民「生活に不可欠」

廃線危惧、利用促進を模索

ＪＲ東日本が利用者の少ない県内路線の赤字を初めて公表した28日、沿線住民からは、廃線を危惧する声が相次いだ。市民生活や地域交流、観光に欠かせない路線だとして、仮に廃線が決まれば「過疎化が加速する」「地域が衰退する」と影響の大きさを懸念。存続に向け、国や県の支援が必要との意見も聞かれた。沿線の自治体はＪＲの動向を注視。利用促進策を模索している。



内房線と外房線の接続駅のＪＲ安房鴨川駅＝28日、鴨川市

勝浦駅から一つ下った外房線鵜原駅。かつては夏になれば電車が到着するたびに海水浴場へ向かう行列ができたが、いまは利用客はまばらだ。

鵜原区長の照川三郎さん（72）は、今回の発表に「全国的に赤字路線が廃止になっているので、そのイメージが強くなる」と危惧。病院に行く高齢者や通学の高校生らが利用しているとして「駅がなくなったら地域が取り残され、過疎化が加速してしまう」と心配する。

鹿島線香取駅の近くに住む石田誠一さん（75）は「生活に欠かせないライフライン。赤字であったとしても国や県、市が支援して存続してほしい」と望む。「茨城県から香取市に通学したり、逆に茨城県に通う学生もいる。地域交流のためにも必要な路線」と訴えた。

内房線が走る南房総市の観光協会事務局長、加藤博和さん（66）は「鉄道の撤退は観光面でも影響が大きくて困る。ＪＲ東日本と一緒に利用客が増えるよう、沿線地域を盛り上げていかなければ」と語気を強めた。

内房線と外房線が接続する安房鴨川駅がある鴨川市の観光協会事務局長、白土雅章さんは「（運行）本数が減ったら、不便だからと利用者が少なくなり、悪循環に陥る。観光的にも非常にダメージを受ける」とつぶやく。サイクリスト向け専用列車「Ｂ．Ｂ．ＢＡＳＥ」を活用するなどして「頑張って残してもらいたい」と要望した。

同駅近くの土産物店の代女性従業員は「廃線にったら仕事に影響が出う」と不安げ。駅前で客待ちをしていた60代の男性タクシー運転手は「通学や院で乗る人は多い。なくったら地域全体が困る」と危機感を示した。

利用客増へ妙案なし

自治体「深刻に受け止め」

ＪＲ東日本の発表について、沿線自治体も「大変深刻に重く受け止めている」と話す。市民生活や観光への影響を指摘し存続を希望するが、利用客の増加へ妙案がないのが現状だ。

内房線が通る館山市。市企画課の担当者は「ＪＲ東日本や国の動向を注視しつつ、利用促進や存続などを協議していく場があれば積極的に議論に参加したい」とした。

南房総市企画財政課は「鉄道は生活の足であり、観光面でも必要な存在。どうすれば鉄道利用を促進できるか、県や近隣自治体とも協力しながら検討を重ねていく必要がある」と受け止めた。

久留里線沿線では、君津、木更津、袖ケ浦市と県、ＪＲで構成する同線活性化協議会が2020年4月に発足。サイクリストをターゲットにしたイベント開催などで利用促進を図っているが、事務局の君津市企画調整課は「もっとイベントの周知を図っていかなければ」。「沿線の人口増は難しいので、交流人口や関係人口を増やし、少しでも活性化につながるように頑張っていくしかない」と強調した。